ことのは。 <<　2007 年 8 月 >> by　ishinositahikari　　連歌　　by 五葉松

2007 年 8 月 09 日

夏。　　夏

あなたに　　きみに

会いたい　　会いたい

チョッと　　ちょっと

せつない　　まぶしい

真夏の夜の夢。　　真夏の朝の光

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

2007 年 8 月 08 日

立秋。　　立秋

虫の音が　　セミの声が

聞こえてきそうな　　聞こえている

涼しさに　　暑さに

静かに　　やかましく

静かに　　そして静かに

秋立ちぬ。　　終わりを告げようと

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

2007 年 8 月 07 日

夕立。　　夕立

夕立に　　夕立に

見知らぬ人との　　知己と出会い

雨宿り
思わぬ会話に
雨も忘れて。

雨宿り
いつもの話
雨がもう上がる

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
2007 年 8 月 06 日

洗車。
打ち水に
虹の
かけらが
見え隠れ。

洗車
ホースから
ほとばしり
つやを増す
ボディ

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
2007 年 8 月 05 日

蚊取り線香。
線香の
香りに
うかぶ
里の夏。

蚊取り線香
線香の
煙が
宙に消えゆき
里も夏

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
2007 年 8 月 04 日

新聞。
新聞の
配達

新聞
新聞受けが
ことりとなった

目覚まし　いつものように

いつものように。　玄関を開ける

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

2007 年 8 月 03 日

夏空。　夏空

ヒマワリが　ひまわりが

お日様　風に揺れ

恋しと　愛らしく

空を見て。　お辞儀をしてる

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

2007 年 8 月 02 日

遅い梅雨明け。　遅い梅雨明け

朝顔の　キュウリの

花と種とが　花と実が

同居する　同居する

葉月に入りて　8 月になり

梅雨明けて。　梅雨明けて

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

2007 年 8 月 01 日

ついたち。　ついたち

暑さも　暑さも

これから　これから

本番なのに　だのにもう
暦の秋は　こよみの秋が
もうすぐそこに。　近づいている

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

2。ことのは

ishinositahikari　原著左　五葉松　対著　右

2007 年 8 月　17 日

暑気払い。　暑気払い

風鈴の　うちわ

音も　金魚鉢

けだるくて　打ち水

残暑あり。　なお残暑あり

2007 年 8 月 18 日

秋の気配。　秋の気配

秋きぬと　秋きぬと

目にはさやかに　目にはさやかに

見えねども　見えねども

風の音にぞ　なおあまりある

おどろかれぬる　夏の面影

（古今和歌集）

2007 年 8 月 19 日

青色。
夏草に
おおわれし
庭先に
小さく　可憐な
ツユクサの咲く。

青色
夏草に
囲まれても、
サツマイモ、
たくましく
育つ。

2007 年 8 月 20 日

草取り。
コオロギの
あと追いかけて
草むしり。

草取り
コオロギや、
どこで鳴くのか
草もぐれ

2007年8月21日

日差し。　日差し
傘立てに　傘立ての
雨傘　雨傘とって
ポツンと　夕立の中
待ちぼうけ。　歩く

2007年8月22日

思い出。　思い出
手花火の　線香花火
煙　しゅしゅしゅ
流れて　閉じこめたい

夏がゆく。　夏の思い出

2007 年 8 月 23 日

処暑。
明け方の風
少しだけ
涼をはこぶか
処暑をむかえて。

処暑
処暑って
初めて聞く
暑い暑い
猛暑であるが

2007 年 8 月 24 日

残暑。
秋の訪れ
ハギの花
蕾のままで
立ち止まり。

残暑
赤とんぼ
サツマイモ
ああ、
芋トンボ

2007 年 8 月 25 日

星空。

久しぶりに星を見る

蚊取り線香に火をともし

ベランダにチョコンと

座って一人きり

いなかの空には及ばないけど

どうしてどうして

なかなかのもの

空を眺めることって

時々ボーッとしたくなる

耳ざわりな音もなく

いろんな想いもとんでいく

一人っきりの　ロマン飛行。

星空

2 年前、

嘘のように

天体望遠鏡で

ひとり庭にたって

毎日毎日空を眺めた

きれいで

あんまりないよね

オリオン

金星

土星

みんな

夢を運んでくれた

2007 年 8 月 26 日

８月最後の日曜日。
思い出を

いっぱい作った

夏休み

あのころに

戻ってみたいな

もう一度。

八月最後の日曜日
空っぽで

過ぎ去った

夏休み

この頃、

元気に過ごすだけ

二度とないのに

2007 年 8 月 27 日

秋刀魚

七輪で

うちわ　パタパタ

つまみにおかずに

サンマの季節

もうそこに。

秋刀魚

ガスコンロで

煙も出ず

おいしくできあがり

大根おろし

醤油であがり

2007年8月28日

旬のもの　よくできたもの

サンマに　ニガウリ

秋茄子　秋なす

ススキを飾り　梨を買い

お酒がつけば　輪切りにして

言うことなし。　水分最高

2007年8月29日

空をながめて。　空を眺めて

雨が運びし　雨をみて

贈り物　涼しさを

涼風　運ぶ空に

秋をふくませて。　夏の終わりの感謝

* Short　Love　Poems *　by　Mie　　返歌　　by 五葉松

- BLOG で書いていた三行詩をこちらに移しました -

傷つくことへの自己防衛と
切なさからの逃避を覚えた
わたしのこころ

僕の心は、傷つき
癒しから
君を求めた

いつかあなたも
私の前から消え去ってしまうでしょう
溶ける雪のように

僕は、
君のそばにいる
まるで幼子のように

あの頃二人で夢見た未来の続きを
もう一度繋げることを願うのは
それもまた　儚い夢のまた夢

あの頃は、何も知らないで
夢中になり
君を夢見た

しらじら夜が明け
あなたの腕の中で見た　有り明けの月
今夜も心に映り　あなた思う夜

夜明け前
君の寝顔を
そっとのぞき込んだ

私の心を求めて　深く
私に愛を求めて　強く
私の身体を求めて　激しく

深い心を　のぞき
強い愛を　感じ
激しい息づかいを　受け止めた

私の愛の全てを貴方に捧げるから
貴方は少しだけ　ほんの少しだけ
あなたの時間を私のために下さい

私の心は過去の中で生きてるから
あなたの心が戻るなら
お願い　戻ってきて

伝えられない想い　もどかしくて
ままならない約束　はがゆくて
空回りの恋心

あなたが　私を抱くのは
私が　あなたに抱かれたいのは
愛情　　それとも　愛欲？

優しくしないで
冷たくしないで
難しい恋心

貴方へと歩き出したこころ
もう戻れない　　戻らない

僕は、君の愛を感じ
君を長く長く
思い続けた

僕の心は、今も生きている
君の心が、変わらなければ
いつでも、そばにいる

もどかしくて、もどかしくて
約束もできない
お互いの行き違いの心道

僕が君を抱くのは
僕が君を抱きたいのは
君がかわいいから

優しい君
冷たい君
難しい君の心

一緒に歩もう
ずっと先まで

先は見たくない　知りたくない　希望の見えるところまで

貴方の胸の鼓動を聞かせて　君の胸の鼓動が聞こえる

貴方の温もりを感じさせて　君の肌のぬくもりが感じられる

もっと強く強く身体を引き寄せて　離さないよ

雑踏の中で寂しさ紛らわしても　雑踏の中で思い出す

夜の静寂が　静寂の日々

孤独を掻きたてる　もう孤独はない

このまま　このまま

あなたの愛に溺れ　君と結ばれ

あなたの心に沈みたい　君の心をつかみたい

想い出を重ね　思い出を重ね

身体を重ね　体を重ね

二人の先にあるものは、、、　ふたりの先にあるものは希望

会いたいと思う気持ち　会いたい気持ちより

どうしたって　思う気持ちが

誤魔化せない　隠せない　隠せない、

淋しさを埋め合うように繋いだ手　寂しさを紛らわすためつないだ心

温め合うと　　暖め合うと

今度は辛すぎて　、、、　　今度は、楽しくなった

あなたと私の　　君と僕との

恋の綱引き　　愛の綱引き

先に手を離すのは、、、　　いつまでの続けよう

こころの中にひそむ　　心の中に潜む

ジェラシーの中の　　愛情の中に

隠せない深い愛、、、　　隠せない深い友情

恋は突然舞い降りて　　心は突然変わり

たった１秒で恋に落ちたとしても　　たった一秒で恋を忘れ

一晩で忘れるような恋ならしない　　ひと段で忘れない友情になる

あなたが私の傍にいる　　君が、遠く離れ

あなたに寄り添える私がいる　　君に思いをはせる僕がいる

ただ、それだけが　　幸せ　　ただ、それだけが　人生

雪が溶けるように　　雪が解けるように

あなたもいつか　　きみもいつか

消えるのですか？　　判るときがくるだろう

あなたの手に
触れてはとける
雪になりたい

君の手を
包んで歩く
手袋になりたい

目覚めたその瞬間から
貴方で始まり
一日があなたで終わってゆく

目覚めた瞬間から
君で始まり
君で終わってゆく

貴方の中の私は
もう消えたのでしょうか
私の中のあなたは　まだ消えない

君の中の僕は
今も生きているでしょうか
僕の中の君と同じように

あなたと　遠く離れても
私の愛は
永遠に眠らない

君と遠く離れていても
僕の友情と愛は
いつまでも目覚めている

白でもなく　黒でもなく
愛を失った　こころは
いつも　中間色

白でも黒でもなく
愛を感じる心は
いつもバラ色